

〔研究ノート〕

# ベトナムの伝統的な衣服に関する研究

—2014年, 2015年の調査から—

下村久美子・谷井淑子・猪又美栄子・小原奈津子・ファン・ハイ・リン

A Study of the Traditional Clothing of Vietnam

—From the Survey of 2014 and 2015—

Kumiko SHIMOMURA, Yoshiko TANII, Mieko INOMATA,  
Natsuko KOHARA and PHAN Hai Linh

For the purpose of preserving traditional clothing and recording its history of Vietnam, the authors visited Hoi An and Tan Chau Village in 2014 and in 2015. This paper offers a brief history of Hoi An and reports the result of interviews with 25 Hoi An residents including experienced elderly ex-tailors; the paper also details figures and describes traditional clothing such as the *ao ba ba* (jackets) and the *quan* (bottoms) and formal traditional clothing for funeral attendants and the dead; the paper also discusses ritual practices found mainly in Hoi An. In addition, the report looks at the process of traditional manufacturing of a silk dye work using *mac nua* (ebony fruits) and other materials. This includes chemical analysis and explanation of the dyeing handicrafts.

*Key words:* Vietnam (ベトナム), Hoi An (ホイアン), Tan Chau Village (タンチャオ村), traditional clothing (伝統的な衣服), *ao ba ba* (アオ・ババ), *quan* (クアン), *mac nua* (マックヌア), dyeing (染色)

## 研究概要

急速な経済発展を遂げたベトナムでは、伝統的な衣服<sup>注1)</sup>は都市部ではほとんど着用されておらず、主として農村部の高齢者のみが着用しており、衣服の種類や着装などについての記録保存が急務である。

筆者らはベトナムの歴史的、文化的な地域の特徴を把握し、伝統的な衣服の形式や構成、着装、衣服素材や染色について、現状や変遷を現地調査し、記録保存することを目的として、2005年から2012年に、本学の国際文化研究所の研究プロジェクト「ベトナム伝統農村集落地域比較研究と保存」に参加し、ベトナム北部ドゥオンラム村、中部フオクティック村、南部フーホイ村、カイバー村において、伝統衣服に関する現地調査を行なった。結果、ベトナムの伝統的な衣服の種類は、ベトナムの民族衣装として知られる上衣のアオ・ザイ、北部ドゥオンラム村のアオ・ナム・タンやアオ・トゥ・タン、腰までの丈の短いアオ・ババ、アオ・カイン、下衣のクアン、下着のイエム、アオ・ロット等が挙げられた。その他、被り物や髪型、繊維素材や染

色材料などについてもそれぞれの地域で特徴がみられた。これらについてはすでに報告している<sup>1)~6)</sup>。

さらに2013年には、ベトナムのホイアン近郊のシルクについて調査し、2014年からはホイアンの伝統的な衣服に関する調査を行なっている。ホイアンは、ベトナムの北部と南部の文化の合流地点であり、古くから交易が盛んで海外からの影響も受けながら発展してきた商業地域である。歴史的な建築物については修復保存が進められ、世界遺産にも登録されているが、伝統的な衣服に関する調査研究は十分とは言えない。

筆者らは2014年9月9日~9月16日、2015年8月25日~9月1日に、ホイアン遺跡管理センターの協力を得て現地調査を行なった。調査対象は、伝統的な衣服の仕立てを行なっていた高齢者や、伝統的な衣服について詳しい高齢者とその家族である。調査人数は、2014年に8件、12名、2015年に11件、13名であった。調査内容は伝統的な衣服の種類、名称、形態、衣服の使用目的、衣服の調達方法、繊維素材、染織技法、縫製技法、装飾技法、着装法(装身具を含む)、着装の意味や象徴、取扱い方法である。

なお、古い伝統的な衣服については、衣服の実測、写真撮影を行なった。ホイアンは観光を主産業とした商業地域であることから、衣服の構成や変遷に詳しい仕立屋への聞き取りをすることで、ベトナムの伝統的な衣服の種類や形態、布幅の変化、これまで断片的・未整理であった葬儀用の衣服についても明確にすることができた。

また、2015年8月25日～27日には、ホーチミン市から西250キロメートルに位置するアンザン省タンチャウ村の染織工場にて、黒檀の実など植物を用いた伝統的な染織工程について調査し、これらの染色布については消費性能を検討した。伝統的な染色技法を継承している工場での調査から、黒檀の実や複数の植物染料を用いた染色に関する情報を得ることができた。

本稿では、ホイアンの歴史、文化的な特徴と、2014年、2015年の現地調査結果から、伝統的な衣服であるアオ・ババ、クアンの構成や形態の変遷、葬儀用の衣服及び植物染料を用いた伝統的な染めについて報告する。

本研究は、科学研究費補助金 基盤研究(C) (代表 下村久美子 課題番号 26350080) の助成を受けたものである。また、本学の倫理審査委員会の承認を得ている。

ホイアンの調査にあたり、ホイアン市遺跡センター所長をはじめ所員の方々にご協力いただきました。心から感謝申し上げます。  
(下村 久美子)

## 注

- i) 国・地方に伝わる固有な衣服で実際に着用されている衣服、または個人が所有している衣服を指す。

## 引用文献

- 1) 谷井淑子他、ドゥオンラム村の衣生活—伝統的衣服と現状—、国際文化研究所紀要、11、154-163 (2006)
- 2) 谷井淑子他、ドゥオンラム村の衣生活、国際文化研究所紀要、13、15-40 (2009)
- 3) 谷井淑子他、フォックティック村の衣生活、フォックティック村 集落調査報告書、国際文化研究所紀要、15、128-135 (2011)
- 4) 谷井淑子他、フーホイ村の衣生活、フーホイ村集落調査報告書、国際文化研究所紀要、18、140-148 (2013)
- 5) 谷井淑子他、カイバー村の生活、カイバー村集落調査報告書、国際文化研究所紀要、20、148-156 (2014)
- 6) 小原奈津子他、ベトナムの伝統的手法によるクーナウを用いた染色について、昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要、21、137-144 (2012)

## 1. ベトナムにおける中部ホイアンの特徴 歴史と文化

ホイアンは北緯15度52分から53分、経緯108度15分から30分の近辺に位置する。トゥーボン川の河口部の左岸に築かれ、ベトナム中部地方の中心都市であるダナン市の南方約28キロメートルにある。2008年にホイアン市はクアンナム省に直属する3級都市<sup>注 i)</sup>として承認された。

この地域には早くから人々が居住していた。ホイアンで出土したサーフィン文化(紀元前1千年紀～紀元後2世紀)の遺跡のなかに、中国、インド、西アジアなどの遺物があることから、当時の住民が多く地域と交流関係を持っていたことが判明している。彼らの子孫は、その後成立した林邑国家の「林邑浦」、そして7世紀から建国したチャンパ王国の「国港」を築き、東西交易を活発に行なっていた<sup>1)</sup>。特に10～15世紀において、ホイアンはヴィジャヤ国都<sup>注 ii)</sup>に近接しながら、チャンパ王国の北にある重要な国際港として発展していった。

ヴィジャヤ滅亡の1471年以降、この地域は大越国の監視を受け、やがて服属するようになった。1558年には阮潢(1524-1613)がフエに拠点を移し、ダンジョンと呼ばれる現在のクアンビン省にあるザン川以南の地域を開拓するために南進した。阮氏は、世界の交易システム形成時代を背景に、国内の農業、工業、手工業、商業の発展とともに、外国との貿易の拡大に力を入れていた。以前のチャム港は、ダンジョンの貿易開発一帯の港システムの重点であり、「フェイフォー」として外国商人の間で有名となった。また、ゴア(インド)、アユタヤ(シャム)、マラッカ(マレーシア)、バタビア(インドネシア)、ルソン(フィリピン)、フォルモサ(台湾)、マカオ、厦門(中国)、出島(日本)、釜山(韓国)などと並び、アジア交易ネットワークの重要な国際貿易港の一つともみなされた。16～17世紀に、アジア諸国のみならず、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスのようなヨーロッパの貿易大国の商人もホイアンを拠点として交易を行なった。阮氏は日本や中国の商人がそれぞれ日本人町、唐人町を設立することだけでなく、町の自主管理や頭領を自ら選出することを許可した。1633～1672年に6人の頭領が日本人町を管理していた<sup>2)</sup>。商人達は、アジア、ヨーロッパの物品をもたらすと同時に、ホイアンから生糸、絹織物、陶器、象牙、胡椒、角、鹿革、貴重な木材、森林資源、銀、銅、錫などを採取し商った。それにより、ホイアンを中心とする海岸地域から高地、中部から北部にいたる交易ネットワークが組織された<sup>3)</sup>。この頃、ホイアンを舞台に、チャム族や現地の少数民族と越族、そして、中国、日本などの外国との接触が盛んになり、

文化交流が積極的に行なわれた。

18世紀後半から河川の変流や阮朝の制限政策、内戦などにより、ホイアンは貿易港の役割を失い、衰退した。仏属時代（19世紀後半～20世紀後半）に、ダナンはフランスへの譲地となり、クアンナム省がフランスの保護下に置かれた。ホイアンにはフランスの公使が派遣され、フランスやヨーロッパの文化要素が多く見られるようになった。

ベトナム戦争終結後、ホイアン町は当時のクアンナム・ダナン省に直属していた。1996年からダナン市はクアンナム省から分離したが、ホイアンはクアンナム省の直轄する町となり、2008年には市として承認された。ホイアン市の面積は約6000ヘクタールで、行政上9区と4社に分けられている。

ホイアン全市には19寺、43廟、23集会場、38ファミリー・チャペル、5会館、11井戸、1橋、44墓地と1千以上の古い民家など、合計1300以上の遺跡がある<sup>4)</sup>。1999年にホイアン旧市街地の60km<sup>2</sup>を占める町並みは世界遺産としてUNESCOに登録された。考古学や歴史学の研究結果によると、ホイアンは、南側に流れるトゥーボン川の砂堆の拡大によって形成された地域であり、町並みはこの上に発展したことが判明している。町並みは東西方向に細長く、南側はトゥーボン川で、北側は1930年代に造られたファンチューチン通りである。町には3本のメイン・ストリートがあるが、バクダン通り（1878）とグエンタイホック通り（1840）は仏属時代に建設された。それより北にあるチャンフー通りは16、17世紀に建設され始めた<sup>5)</sup>。チャンフー通りの東には華僑の会館や関公廟があり、西には日本橋があり、グエンティミンカイ通りと交わる。町並みには400軒の古い町家がある。伝統的町家は木造平屋で、前屋と後屋の間に橋屋と中庭が設けられたのが特徴である。

ホイアンにはこうした有形文化財以外にも、多くの無形文化財が保存されている。ホイアン住民の記憶をはじめ、風俗習慣、民間信仰、農業、漁業、町人生活に関わる祭り、伝統芸能、伝統手工業などがあるが、特に、キムボン村の大工、タンハー村の陶器、フォックケウ村の青銅鑄造が有名である。さらに、ホイアンは豊富な食文化を有する。ホイアンの人々は川や海、森林、農村から集まった素材を生かし、ベトナム、中華、ヨーロッパの調味法を融合して様々な料理を創出している。バレー井戸の水で作ったカウラウ麺、中部の辛味の鳥ご飯、米で作ったホワイトローズや、揚げワンタン、茶飯、プリン、フランスパンなどはホイアン特有の料理として知られる。

ホイアンは文化遺産でありながら、人々が実際に生活する町であり、いわゆるリビングヘリテージである。このような遺産の保存と、住民の生活環境改善や地域の経済開発

を両立することは容易ではない。1995年から2010年までの15年間、ホイアンは300万人以上の観光客を迎えた<sup>6)</sup>。この観光地化により町の景観や人々の生活が変容している。2008年現在、ホイアンの観光客向け店舗のおよそ80%がテナントであり、その借主や従業員の約85%は旧市街地出身者でも在住者でもないのである<sup>7)</sup>。このような傾向で、ホイアンはフェイクタイプの建物や土産物店が増加し、特有の文化価値とその伝統継承を失う危機に直面している。今後、生きている町の保存と開発を両立するのに、ホイアン市は遺産の本来の価値と魅力を正確に認識し、適切な開発政策を調整すべきと思われる。

（ファン・ハイ・リン）

## 注

- i) ベトナムの都市は特別都市と呼ばれるハノイ市とホーチミン市以外、1級から5級までに格付けられる。ダナン市は全国の3つの1級都市のグループに入るが、ホイアン市は41ある3級都市のグループに入る。
- ii) ヴィジャヤは現在のビンディン省にある。

## 引用文献

- 1) 菊池誠一「遺跡分布からみたホイアン地域の形成と展開」、桜井清彦・菊池誠一編『近世日越交流史 日本町・陶磁器』、柏書房、107-134（2002）
- 2) グエン・トゥア・ヒー、ファン・ハイ・リン「十六～十七世紀の日本とベトナムの貿易関係」、桜井清彦・菊池誠一編『近世日越交流史 日本町・陶磁器』、柏書房、95-104（2002）
- 3) ドー・バン「ホイアンと国内各地との商業関係と商業形式」、日本ベトナム研究者会議編『アジア文化叢書・10: 海のシルクロードとベトナム』、穂高書店、275-300（1993）
- 4) ホイアンの概要、<http://hoian.vn/tong-quan-pho-co-hoi-an/>
- 5) 菊池誠一『遺跡分布から見たホイアン古都市研究』、世界、47-48、96（2010）（ベトナム語）
- 6) ホイアン文化情報センター・ホイアン観光課「観光課15年活動報告書」、4（2010）（ホイアン遺産管理保存センターの提供データ）
- 7) 内海佐和子「観光地化に伴う景観の変化とコントロール」、藤木庸介編『生きている文化遺産と観光』、学芸出版社、183（2010）

## 2. ベトナムの伝統的衣装アオ・ババの変化 について —ベトナム中部のホイアン調査から—

### 1. はじめに

ベトナムに伝わる固有な衣服で実際に着用されている「伝統的衣装」は、時代とともに変化している。2005年から行ってきたベトナム北部・中部・南部の衣生活調査では、伝統的衣装を日常的に着用しているのは主に70歳以上の高齢女性であり、高齢男性は少数であることが分かっている。筆者らは、南部のフーホイ村の調査から、家の中で着る半袖のアオ・トゥイ（Ao tui）は裁ち出し袖からセットインスリーブに変化したこと、外出時や来客の際に上着としてアオ・トゥイの上に重ねて着用される長袖で腰までの長さのアオ・ババ（Ao ba ba）は裁ち出し袖からラグランスリーブに変化したこととその理由を推測した<sup>1)</sup>。

2014・2015年のベトナム中部の商業都市ホイアンの調査では、旧市街地が世界遺産として認められた観光都市であることから、ホテルのフロントの女性や観光客の農業体験に対応する人は伝統的衣装を着用しており、街には注文者の身体に合わせて伝統的衣装の仕立てをする店も見られた。しかし、一般的な高齢者については、日常着として伝統的衣装を着用している人は少なかった。ホイアン遺跡管理センターの協力を得て、伝統的衣装の仕立てを職業としていた高齢者や伝統的衣装に詳しい高齢者に聞き取り調査等を行い、アオ・ババの形や縫製方法の変化について考察した。

### 2. 方 法

伝統的衣装の仕立てを職業としていた高齢者9名（現在も店主として仕立てに関わっている人を含む）と伝統衣装に詳しい高齢者16名に聞き取り調査と所持衣服の調査を行った。内容は伝統的衣装の袖の形式やネックライン、ゆとり量、裁断および縫製方法などである。さらに、1954年から伝統的衣装を仕立てていた80歳男性に1950年頃の形式のアオ・ババの製作を依頼して、古いアオ・ババの形式について検討した。また、伝統的衣装の仕立屋の75歳の女性店主に裁ち出し袖とラグランスリーブのアオ・ババの製作を依頼して、現在のアオ・ババの形式および縫製方法について検討した。

### 3. 結果および考察

聞き取り調査から、男性のアオ・ババの形式は1950年頃から現在まで変化していないが、女性用は1950年代からネックライン、袖の形式、身頃のシルエットなどが変化していることが分かった。男性用は変化していないが女性用は様々な変化が見られるのは、ベトナムの民族服として

有名なアオ・サイについても同様である。しかし、古い形式である裁ち出し袖についても、80歳以上の高齢者や観光客からの注文により少数ではあるが製作されている。身頃および袖幅のゆとりが多いことから、ゆったりとして着心地が良いということで80歳以上の高齢者に好まれている。それよりも若い世代では、ゆとりの少ない細いシルエットが好まれているようである。

#### (1) 1950年頃のアオ・ババ

図2-1に2014年に製作した1950年頃の男性用のアオ・ババを示した。製作者は前述の伝統的衣装の仕立てをしていた80歳の男性である。製作したアオ・ババは男性用のサイズで製作された。1950年代までは頸付け根に沿った丸首、裁ち出し袖で、ダーツの無い平面的な形であった。両裾にポケットがあり、前あきの留め具はボタン6個である。現在の女性用のアオ・ババはスナップを使用しているが、スナップは正式の留め具とは認められないので男性には使用しないということである。

縫製方法で興味深いのは、ネックラインの見返しの幅は男性が37~40cm、女性が32cmとかなり幅が広いことであった。この見返しを「蓮の葉」と呼ぶ。また、ネックラインと前打ち合わせの見返しをつなげて裁断するが、これを「スプーン型に裁断する」と言う。この時代は服の傷んだ箇所直しの注文があり、アオ・ババの場合は裁ち出し袖から上の部分、すなわち袖と身頃の上部を新しい布にすることが多かったということである。例えば前身頃は上から15cm、後ろ身頃は20cmというように前後差をつけて修理していた。農業や商業で日常的に行われていた天秤を担ぐ等の作業による上着の上部の痛みが激しいので、このような修理が行われたと推測される。同様の理由でネックラインの見返し幅を広くして肩の部分を丈夫にしたのではないだろうか。

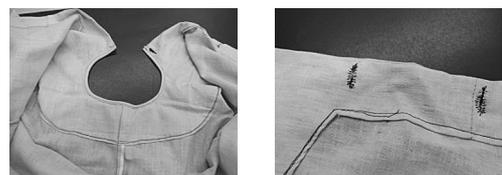


図2-1 1950年頃のアオ・ババの形（2014年製作）

### (2) 1960年代の女性のアオ・ババ

図2-2は91歳(2014年調査時)の女性が所有している1960年代に作られたアオ・ババである。妹のサイゴン土産であり、大切に保存されていたと思われる。袖は裁ち出し袖で身頃にダーツは無く、ウエストから下の腰の幅を広くした形である。ウエストから下の丈が長く腰の幅は広げてあり、(1)の古い形式とは異なる新しいシルエットとして認識されたのではないかと推測する。留め具はスナップで、ネックラインの始末は共布のバイアステープが使われている。



図2-2 1960年代のアオ・ババ(91歳(2014年調査時)の女性がサイゴンの土産としてもらったもの)



裁ち出し袖のアオ・ババ(2015年製作)



ラグランスリーブのアオ・ババ(2015年製作)

図2-3 現在のアオ・ババ

### (3) 現在の女性のアオ・ババ

2014年に伝統的の衣服の仕立屋で製作した女性用の裁ち出し袖とラグラン袖のアオ・ババを図2-3に示した。店主の女性はサイゴンで技術を学び、ホイアンに戻ってから「欧越服縫製育成専門私塾」を開き、一時は1日3クラス(1クラス20名)に教えていたということである。以前は洋服の仕立でもしていたようである。

裁ち出し袖の場合は丸首、ボタン留め、両ポケットで伝統的な形であるが、胸ダーツが加えられている。袖幅は1960年代のもの(図2-2)よりも細い。ラグラン袖の場合はハート形のネックライン、スナップ留めでポケットは無い。身頃に胸ダーツとウエストダーツがあり、ラグラン袖の幅は一般的な洋服の場合よりも細いことが特徴であろう。身頃の袖ぐりの深さを浅くすることにより袖ぐり寸法が小さくなるので袖幅を細くすることができる。現代のアオ・ババのデザインと共通するもので、ウエストと袖幅を細くすることで身体を細く、胸を強調する効果があると思われる。現代のベトナムの女性の美意識により、変化したのであろうか。なお、袖ぐりの深さは浅い方が腕を上げやすくなる<sup>2,3)</sup>ので、袖幅が細くても日常動作には差し支えないと考えられる。セットインスリーブの着用実験では、上肢を動かした時の方が静止時よりも1cm浅い「袖ぐりの深さ」の適合度が高い結果であった<sup>3)</sup>。しかし、元々はクリミア戦争の時に負傷者が衣服を楽に着脱できるように考案されたという機能的なラグランスリーブが、美しいシルエ

ットを求めて変化していることはとても興味深い。製作者の洋服の技術が生かされていると考えられる。

裁ち出し袖はゆったりしているが、腕を降ろした時に腕付け根の周辺にしわが出来て美しくない。ラグランスリーブは身頃と袖幅のゆとり量が少なくても腕を挙げる事ができて美しいことと、裁断の仕方の違いから裁ち出し袖よりも布量が少なくても良いことから、女性のアオ・ババはラグランスリーブに変化した。そして、裁ち出し袖からラグランスリーブに袖形式が変化すると同時に身頃に胸ダーツとウエストダーツを取って身体の形に沿ったウエストの細いシルエットに変化したことが分かった。さらに、袖幅を細くすることにより、身体の細さと胸のふくらみを強調する特徴的なシルエットを作り出している。なお、ネックラインは、頸付け根に沿った丸い形からU字形、ハート形などの頸付け根から離れた形になった。ネックラインが頸から少し離れるので着用感は楽で、涼しい形である。

(猪又 美栄子)

### 引用文献

- 1) 猪又美栄子, 谷井淑子, 下村久美子, 小原奈津子, 研究ノート ベトナム南部の伝統的の衣服の袖の形式の変化について—フーホイ村の調査から— 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 22, 71-78 (2013)
- 2) 近藤れん子, 近藤れん子の婦人服造形理論と Pattern 東京源流社 (1992)
- 3) 猪又美栄子, 堤江美子, 西野美智子, 衣服のゆとりと動作適合性に関する一考察 家政学雑誌 33, 129-135 (1982)

### 3. ベトナムの伝統的下衣（クアン）について

#### 1. はじめに

クアン（Quan）はズボンの意味で、ベトナム北部、中部、南部の男女ともに着用するベトナムの伝統的な下衣である。アオ・ババ（Ao ba ba）、アオ・カイン（Ao canh）などの伝統的な上衣と組み合わせて着用する。現在では、一般に中・若年層はいわゆる洋服のズボンやジーンズを着用するが、高齢者の多くは現在でも伝統的なクアンを日常的に着用している。伝統的なクアンは、全体にゆったりとした仕立てで、股の中央に接ぎ目のある一般的なズボン形式のクアンと腰部から脚部にかけて接ぎ目のあるものに分類でき、さらに接ぎ目が前・後各1本のもの、2本のものに分類できる。いずれも直線構成であり、裁断・縫製により股下部分がバイアスになるのが特徴である。

#### 2. 方法

ホイアン遺跡管理センターの協力を得て、2014年9月、2015年8月に伝統的衣の仕立て経験のある高齢者9名に伝統的なクアンの形態の変遷、構成、裁断などについて聞き取り調査を行なった。中でも現在も市場で仕立屋を営む80歳の男性は伝統衣の製作に長年携わってきた熟練者であり、古い形態である脚部に接ぎ目のあるクアンの製作経験も豊富であることから、伝統的な接ぎ目が2本と1本のクアンの製作を依頼し、布の裁ち方、縫製などの一連のプロセスを動画で記録・保存し考察を行なった。

#### 3. 伝統的なクアンの形式

脚部に接ぎ目のある伝統的なクアンのうち、どちらがより古い形式であるかを高齢者に聞き取り調査をしたところ、接ぎ目が2本のは狭い布幅（35～45 cm）でも製作が可能であり、接ぎ目が1本のは広幅の布（80～90 cm）が必要であることから、幅の狭い布でも仕立てることのできる2本の接ぎ目の方がより古い形式であることが分かった。したがって伝統的なクアンの形式の変遷は、脚部の接ぎ目が前・後に各2本のものから、接ぎ目が各1本のものへ、そしてズボン形式の股の中央に接ぎ目のあるクアン・ダイ・ズア（Quan day guia）へと変化したことが確認できた。これらの接ぎ目のあるクアンが着用されたのは1960年代までであり、現高齢者の多くは股の中央に接ぎ目のあるクアン・ダイ・ズアを着用している。したがって現在は仕立屋においても、接ぎ目のある古い形態のクアンはほとんど製作されておらず、仕立てることのできる技術者もごく少数であることが確認できた。

### 4. クアンの構成

#### (1) 接ぎ目が2本のクアン

この形式のクアンは中部、南部には現在も残されているが、北部ドゥオンラム村では確認することができなかった。両側の脚部布と腰部から裾にかけての襠様の布6枚で構成される（図3-1）。襠様の布の一方の裾には小さな矩形の布を接いでいる。ホイアンではこの部分をChan（足）、Con（小さい）といい、小さい足があるという意味で、中部ホイアンではこのクアンをクアン・チャン・コン（Quan chan con）と呼ぶ。南部のカイベー、フーホイではクアン・ダイ・ネン（Quan day nem）あるいはクアン・ラ・ネン（Quan la nem）と呼称する<sup>1)</sup>。接ぎのあるクアンの名称については、北部、中部、南部で異なり、また各地域においても複数の呼び名があることが確認できている。裁断により、股下はバイアスとなり、布が摩耗、損傷した場合には、股中央の襠様の部分だけを新しいものに取り換えるのが容易であることも特徴である。

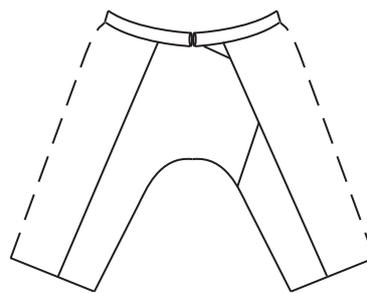


図3-1 接ぎ目が2本のクアン

#### (2) 接ぎ目が1本のクアン

北部のドゥオンラム村にこの形式のものが多く残されており、クアン・チャン・クエ（Quan chan que）という名称で呼ばれる<sup>2)</sup>。中部のホイアンでは、一般にクアン・チャン・コン（Quan chan con）あるいは、クアン・ダイ・グァン（Quan day ngang）とも呼ばれ、南部のカイベー、フーホイではクアン・ダイ・ネン（Quan day nem）と呼称される。脚部から股下にかけて一枚布で裁ち、接ぎ目が2本のものと同様に、股下から裾口にかけて小さな矩形の布を接ぎ、4枚の布で構成される（図3-2）。裁断により股下がバイアスとなる。

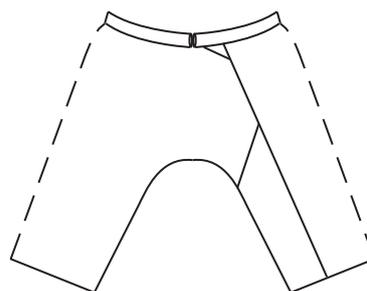


図3-2 接ぎ目が1本のクアン

## 5. クアンの裁断

脚部に接ぎ目のある古い形式のクアンの、斜めに布を折る特徴的な裁断図については、図3-3、図3-4に示す。クアンを一着仕立てるのに必要な用布量は、接ぎ目が2本のは布幅40cmで約4m、接ぎ目が1本のは布幅80cmで約2mである。両者ともに布幅を最大限に生かした直線裁ちであり、股下をカットした部分(☆)から、裾部分に接ぐ小さな矩形の布とベルト布を裁つ。また、カットした三角布(★)は、ウエスト部分にできる三角形の隙間の部分にはめ込むことにより、腰のラインを滑らかにすることができ、余り布がほとんどでない合理的な裁断法であり、布が貴重な時代に工夫された非常に優れた裁断・縫製方法である。接ぎ目のある古い形式のクアンの中でも、腰部の隙間の部分に三角布を接ぐタイプのクアンは最も古いものであることが仕立て経験者への聞き取りから明らかとなった。現在の仕立屋では、腰部に小さな三角布を接ぐクアンについて知る者は少数であり、このような古い形態のクアンを製作することのできる技術者は現在ではごく僅かであることが明らかとなり、伝統的な裁断法、縫製技術の記録・保存が急務であることが確認できた。

脚部に接ぎ目のあるクアンは、両者ともに直線裁ちで股下部分がバイアスになり、裾口が広く開放的であるのが特

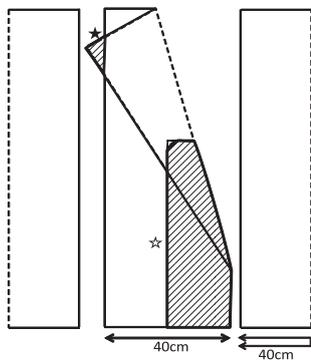


図3-3 接ぎ目が2本の裁断図

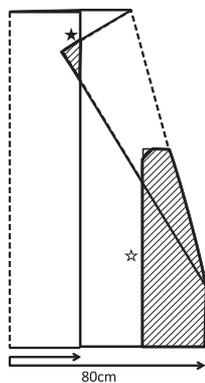


図3-4 接ぎ目が1本の裁断図

徴である。布幅を最大限に生かした布に無駄のない合理的な構成であり、腰幅、着丈等は着用者の体形に合わせて調整する。股下がバイアスであるため動きやすく、腰幅が広く、裾口もゆったりと広いため、通気性にも優れ涼しく、ベトナムの高温多湿な気候風土と起居動作に適応した衣服形態といえる。着用には前後差はなく、ウエストに通した紐を結んで着装する。1950年代まで、特に男性の場合は腰布の幅を広くし、その布を前で交差し、内側あるいは外側に巻き込んで着装したが、現在は男女ともにベルト部分にゴムを通すのが一般的である。

(谷井 淑子)

## 引用文献

- 1) 谷井淑子他, フーホイ村の衣生活, フーホイ村集落調査報告書, 国際文化研究所紀要, 18, 140-148 (2013)
- 2) 谷井淑子他, ドゥオンラム村の衣生活—伝統的の衣服と現状—, 国際文化研究所紀要, 11, 154-163 (2006)

## 4. 伝統的な葬儀用の衣服について

### 1. はじめに

これまでの調査では、伝統的な冠婚葬祭時の衣服について調査している。ベトナム北部・中部・南部において伝統的な葬儀用の衣服について聞き取りを行ってきたが、いずれも断片的なものであった。<sup>1)</sup>

今回の調査では、伝統的な葬儀用の衣服を製作していた仕立屋から、ホイアンの古い習慣による葬儀用の衣服やしきたりについて聞き取りすることができた。ホイアンでは1990年代以降は葬儀社が死者の衣服などを用意するようになっており、親族もアオ・ザイなど伝統的な衣服ではなく、洋装で葬儀に参列する習慣に変化しているため、伝統的な葬儀用の衣服について、記録保存することは意義のあることである。

### 2. 方法

2014年の調査にて、ホイアンで伝統的な衣服の縫製を身に付けた80歳の仕立屋に聞き取りを行なった。この仕立屋はホイアンで縫製技術を身に付け、1970年頃から1990年位まで伝統的な葬儀時の衣服を製作していた男性である。調査内容は、伝統的な葬儀で死者や親族が着用する衣服の形態や着装、素材、しきたりについてである。

### 3. 結果

#### (1) 死者の衣服

死者の衣裳は、白色の麻のアオ・ババとクアン、その上に赤いアオ・ザイを重ねて着用させる。ただし、1枚で着

用させる場合は、内側は白、外側は赤色のアオ・ザイを着用させる。手足には、指のない白い手袋と靴下を履かせ、頭には、内側は白、外側は赤の布を使用し、図4-1のように顔を隠して紐で縛り、観音様のハートと呼ばれる形に着装させる。このように着装させた遺体は、頭の下に白い枕を敷き、仰向けに寝かせる。

遺体に衣服を着用させた後、図4-2のように90cm幅の綿の布を長さ150cmに切り、経方向に分割し、死者を運ぶために縛る布を準備する。男性は2本、女性は3本である。この布を男性用は1本目を4本、2本目を3本の計7本、女性用は図4-2に示すように3本ともに3本の計9本に、手で途中まで裂き、図4-3に示すように肩からふくらはぎにかけて、この布を用いて縛る。遺体を運ぶ際は、この紐をもって移動する。この紐の数は、男性は7つの命、女性は9つの命を持つとする信仰によるものである。

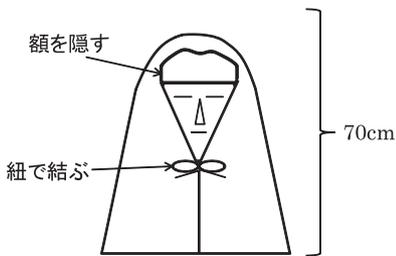


図4-1 死者の被物

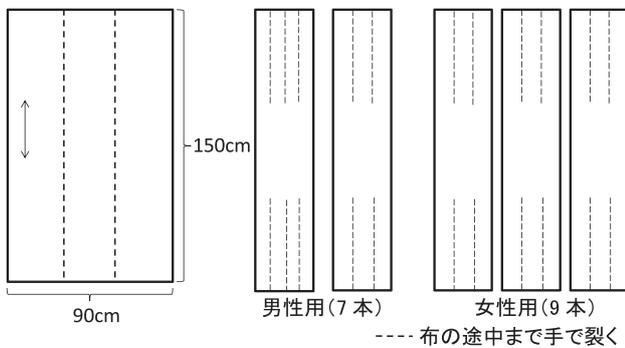


図4-2 死者を縛る紐

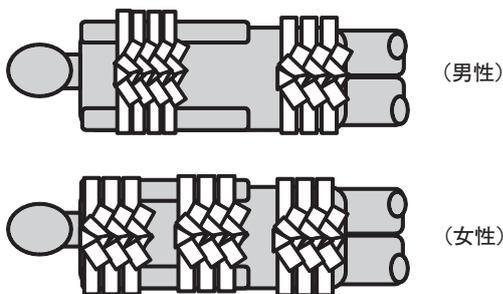


図4-3 死者の体を布製の紐で縛る

## (2) 親族の服装

### 1) 長男の服装

麻や綿素材の白いアオ・ザイとクアン、白い帽子(モチエ)を着用し、頭には藁の輪を被り、腰には藁の紐を巻いた(図4-4)。アオ・ザイの縫い代は、両親の片方が存命の場合は前身頃の縫い代を外側に出し、両親共に亡くなった場合は、後ろ身頃の縫い代も外側に出す。また、父親が亡くなった場合は竹の棒を、母親が亡くなった場合はボン(竹に近い植物)の棒を持つ。

かつては、死者が長男の場合、その長男は普通の袖幅と広い袖幅のアオ・ザイを重ねて着用していた。その後、袖の広いアオ・ザイに袖幅の狭い袖をつけた1枚仕立てのアオ・ザイを着用するように変化した。袖の幅については明らかではないが、これまでの調査で、中部のフォックテックの調査では男性が祭祀の時に普通の袖幅と広い袖幅のアオ・ザイを重ねて着用しており、一般的なアオ・ザイの袖口幅が14cm、袖幅の広いアオ・ババの袖口は31cmであった。また、南部のフーホイでは、元は裕福な高齢者が結婚式の時に袖幅の広いものを重ねて着ていたことがわかっている。袖幅の広いアオ・ザイは葬儀の時に家を継ぐ直系の長男が着用する儀礼的な意味があると思われる。

### 2) 長男以外の親族の服装

死者の妻、長男以外の息子、息子の嫁、未婚の娘は、長男と同様に縫い代を外側にしたアオ・ザイを着用する(図4-4)が、嫁いだ娘は普通のアオ・ザイを着用する。親族ではあるが、他家の者であることを示していると思われる。また、死者の未婚の娘と息子の嫁はモチエを深めに被り、顔をあまり見せないようにする。死者の妻や未婚の娘、息子、息子の嫁は、モチエの上から藁の紐の輪を被るが、死者の夫はモチエを着用するが、藁の紐の輪は被らない。

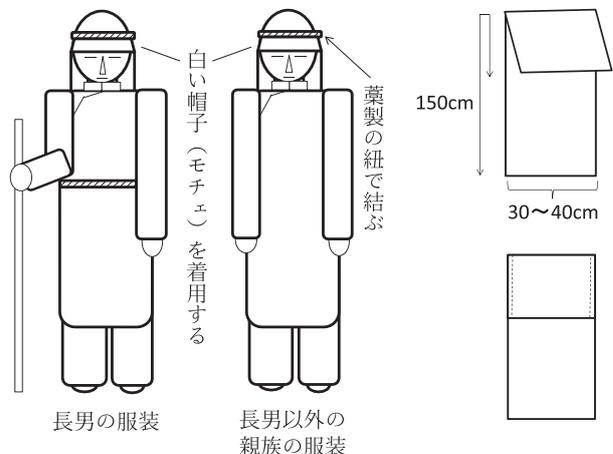


図4-4 親族の服装

図4-5 モチエの構成

### 3) モチエ用の布

モチエは90 cm または80 cm 幅で、長さ150 cm の綿の布を用い、幅90 cm の場合は3等分し30 cm とし、80 cm 幅の場合は2つに分けて40 cm 幅とした布を用いる。この布を、頭に合わせて布の端を折り返し、端を合わせて両端を簡単に縫う(図4-5)。また、この帽子は埋葬する時に縫い糸をほどき、頭に巻く。

### 4) その他のしきたり

棺を埋葬のために運ぶ際、長男は前述の棒と線香の鉢を持ち、常に棺を見ながら後ろ向きに歩く。死者の方に顔を向け、背面は見せない。さらに霊柩車まで遺体を運ぶ際や霊柩車から墓所までは、棺の頭部を保護するように、家族以外の人が赤と黄色の配色の大きな傘をさす。

(下村 久美子)

### 引用文献

- 1) 谷井淑子, 小原奈津子, 猪又美栄子, 下村久美子, フーホイ村の衣生活, フーホイ村集落調査報告書, 国際文化研究所紀要, 18, 140-148 (2013)

## 5. タンチャウ村の伝統的な染色について

### 1. はじめに

ベトナム南部アンザン省タンチャウ村はメコンデルタに位置し、かつてはカンボジアとの商業上の交流も盛んであったようだ。一般にメコンデルタ地帯は植物の種類が豊富で、植物を使った染色も民間で盛んに行われていた。このタンチャウ村では黒檀の実(マックヌア, Mac nua)を用いて黒色に染色した布が盛んに生産されていた。この黒く染色された朱子織の絹布(縐子)は光沢が強く、革の一種のような独特の風合いをもっている。

我々がこれまでに実施してきたカイベーやフーホイなどのベトナム南部の衣服調査では、高齢女性の所有する伝統的の衣服のなかにしばしばこの素材のクアンが見られた。このことから、この黒色の縐子は南部地域の女性にはクアンの素材として人気のあった布と推測される。また、タンチャウ村では、この布は夏には涼しく、冬には暖かい布素材として評されていた。しかし同村では現在この伝統的染色を行う工場は一軒しか残っていない。この工場では絹糸を仕入れ、糸撚り、織り、染色をすべて行っている。著者らはこの工場で行っている黒檀の実を用いた絹の染色について調査した。

### 2. 方 法

アンザン省タンチャウ村の染織工場であるタム・ラン・シルク(Lua Tam Lang)で織りおよび黒檀を用いた染色作

業工程を見学し、この工場主の家族(Nguyen Huu Tri氏)および染色に携わる職人へのヒアリングによって調査した。

また、同工場では、黒檀の実の他にも種々の植物を用いて絹布を染色していた。これらの染色法についてもヒアリングを行った。

## 3. 結果および考察

### (1) 黒檀の実を用いた絹の染色

タム・ラン・シルク工場でのヒアリング調査から、当初、カンボジアから黒檀を使ったこの染色法を教わり、その方法を基に、使用する機具等を工夫し、現在の手法に至っているとのことである。

染色にあたっては、黒檀の実を水と共に潰して染液とする(図5-1(a), (b))。この染液は新鮮なものでなければならず、染色毎に調製される。この染液を用いた染色工程は以下のように6段階からなる。

- 1) 絹布を染液に浸け、日光に曝す(干す, 図5-1(e))を4日間繰り返した後、染色布を川で洗う(図5-1(f))。再び4日間染液に浸け、干す作業を続けた後、川で洗う、さらにこれを2日間続けた後、川で洗い流して、干す。ここで初めに1 kgの布が1.4 kgになることを目安とする。その後、布を巻き取り、水分を含ませ、布の裏となる面を錘で叩く(一巻につき20分以内, 図5-1(g))。
- 2) さらに4日間、染液に浸け、干す、川で洗う作業を繰り返した後、布の状態を検査し、鉋で結び目を取り除くなど布の表面を均一かつ平滑なものに整える。4日間、染液に浸け、干す工程を繰り返し、川で洗い流して干す。ここで布の重さが1.6 kgになることを目安とする。その後、1)と同様に布を巻き取り、水分を含ませ、布の裏の面を錘で叩く。
- 3) 3日間、染液に浸け、干す、を繰り返す。川で洗い流し、干す。この時の布の重さは2~2.2 kgを目安とする。2)と同様に布を巻き取って叩く。
- 4) 3~4日間、染液に浸け、干す、を繰り返す。川で洗い流してから干す。この時の布の最適重量は2.2 kgである。再び布の表の面を巻き取り叩く。
- 5) これまでの半分の濃度の薄い染液に浸け、干すを3回(1日間)繰り返す。川で洗い流し、干し、巻き取り、布の裏の面を叩く。
- 6) 洗剤で洗ってから川で洗い流し、干す。布を巻き取って、2~3分間、布の両面を叩く。アイロンをかけてしわを伸ばす。

工場の話では、染色後に日光に干さないで染料(タンニン)が布に付きにくく色も薄くなるとのことである。このことから日光によってタンニンの重合が進み、繊維表面に

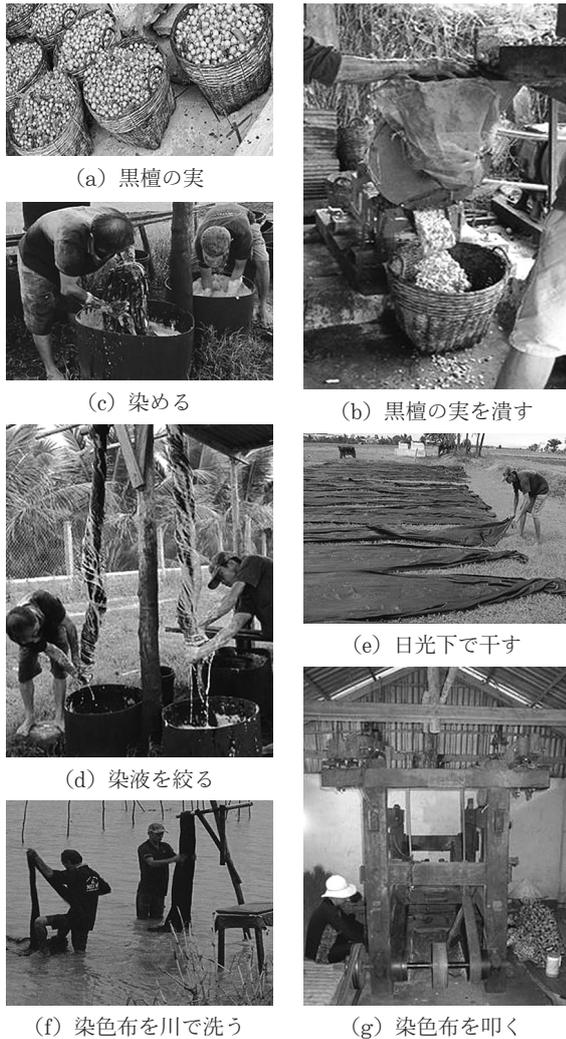


図 5-1 黒檀の実を用いた絹布の染色工程

強く固着するものと推測される。1) の工程では染料が強く付着していない状態であるが、2) の工程が終わる段階では染料はある程度強く付着しているため、布の検査と表面を整える作業が可能となる。また、4) の工程が終わる段階では染料はほぼ完全に付着しているため、4 日間以上染色作業を続けてもそれ以上には染料は付着しない状態であるとのことである。

黒檀の実の色素の主成分はタンニンである。染色布の繊維断面を顕微鏡で観察すると、タンニンはほとんど繊維の表面に付着していた<sup>1)</sup>。また、染色後の布の重量が未染色布の 2 倍以上にもなり、これは絹布と同じ重量の染料が繊維表面に付着していることになる。従って染色布の表面には多量のタンニンが付着し、さらに、染色工程の間に水分を含ませて布を叩く作業が繰り返される。これらのことが、染色布の表面の滑らかさや特徴的な触感と光沢の要因の一つとなっていることが考えられる。さらにこの布の染色堅牢度を測定したところ<sup>1)</sup>、図 5-2 に示すように、日光、汗、

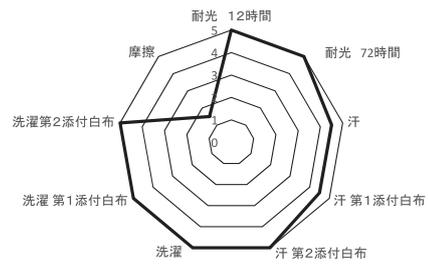


図 5-2 黒檀で染色した絹の染色堅牢度<sup>1)</sup>

洗濯に対する堅牢度は 4~5 級で堅牢であったが、摩擦のみが 1~2 級であった。この原因として、タンニンが繊維内部に浸透せず、表面に付着していることと、絹繊維自体が摩擦に弱いことが考えられる。今後この染色布の消費性能を詳しく評価測定し、この黒檀による染色が絹布の性質にどのように影響するのか明らかにする予定である。

## (2) その他の樹皮を用いた絹の染色

今回調査できた染色布の色とこれに使用された植物は以下の通りである。

- 茶色、フエットロン (Huyet rong, 和名: 竜血樹)
- 薄茶色、トン (Thong, 和名: 松)
- 黄色、バウ ナウ (Bau nau, 和名: 不明)
- 赤系色、ト モック (To moc, 和名: 蘇木, スオウ)

染色には上記植物の樹皮を刻んで水中に入れ、加熱して色素を抽出して染液とする。この染液に絹布を浸し、加熱して染め、絞液後日光に干す工程を 40~50 回繰り返す。この場合もまた黒檀の場合と同様に、染色布を叩くという作業がなされているとのことであった。このため、これらの染色布もまた強い光沢<sup>2)</sup>をもつ。

黒檀やこれらの植物を用いた染色法は、現代の化学染料による染色に比べて非常に労力のかかるものであるが、特に黒檀による染色布は独特の風合いや光沢をもっており、今やわずかに残された貴重な伝統技術であると考えられる。

(小原 奈津子)

## 引用文献

- 1) 細谷美帆, 小原奈津子, 下村久美子, PHAN Hai Linh: 日本繊維製品消費科学会 2016 年年次大会予稿集, 179 (2016)
- 2) 下村久美子, 相島雪乃, 細谷美帆, 小原奈津子, PHAN Hai Linh: 日本繊維製品消費科学会 2016 年年次大会予稿集, 178 (2016)

(しもむら くみこ 環境デザイン学科)  
 (たにい よしこ 環境デザイン学科)  
 (いのまた みえこ 環境デザイン学科)  
 (こはら なつこ 環境デザイン学科)  
 (ファン・ハイ・リン ハノイ国家大学)